

いわゆる「宗像系文物」の衰退と終焉

太田 智・向井 浩太 宗像市教育部世界遺産課

要旨：宗像地域では最近、宗像系文物⁽¹⁾の分布から地域間交流の実態が解明されはじめたが、6世紀末以降だと、保守性の強い宗像系文物は徐々に衰退したり新たな要素と折衷するため、分布論に必要な宗像系文物の抽出が難しい問題があった。そこで、本稿では古墳や土器、土器の使用方法も含めて属性レベルでできるだけ詳細に検討して、より正確な内容把握に努めた。

その結果、石室構造や土器供献等はおおむね先行研究の指摘通りとなったが、宗像系の細部属性がV・VI期にも残る点や、5～7世紀では階層と石室構造の関係に大きな変化が生じていた点、石室内土器供献の器種組成に一定の傾向があり、前代の墳丘での土器供献とは脈絡が異なる点なども明らかとなった。その背景のひとつとして、602年の朝鮮半島の緊迫化に伴う来目皇子の北部九州への進駐と、それに伴うミヤケを介した物資輸送等による交流の活発化が想定され、宗像地域では地域間交流や軍事動員などを担うなかで他地域・集団との交流が活発になり、宗像系文物の変化が促されたものと考えた。

キーワード：宗像系文物、古墳、須恵器、土師器、地域間交流

1. はじめに

宗像地域では、1990年代から地域固有のモノ・コトを捉える動きが活発化し、宗像型横穴式石室墳や須恵器脚付罐、垂耳状口縁甕や脚付（大型）短頸壺、土師器高坏Ea類など、多くの考古資料が「宗像系」として認識された。

最近ではこれらの分布から具体的に地域間交流を検証する動きも始まっており、福岡平野西部（小嶋2012、太田・椎葉2020）、壱岐（太田2020、中島2023）、瀬戸内海沿岸部（小嶋2021、岩崎2024）など、一部成果も提示された。一方、当然ながら他地域にある宗像系文物を正確に把握するには、属性レベルまで踏み込んだ詳細な基礎研究が必須となるが、これが最も難しいのが今回対象にする6世紀末から7世紀にかけての様相である。これは在地的・伝統的な要素が新型式に駆逐あるいは折衷したりして、地域的な特徴が薄まり、これら衰退期の資料群を他地域で捉えるのは至難だからである。そこで本稿では先学の所見を踏まえつつ、今後の地域間交流研究の足掛かりとして、古墳・須恵器・土師器等を用いて6～7世紀の変遷過程を詳細に検

討・整理して、その社会的背景まで提示する。

なお、本稿は土器供献に関する分析と一部執筆を向井が行い、他は太田が執筆した。

2. 「宗像系文物」研究の現状と課題

まずは宗像系文物が各々どのように展開して、消滅するのか、研究の到達点を確認する。

（1）宗像型横穴式石室墳と終末期

古墳建築時の墓壙掘削が深く、袖部は平積みで玄門高が低く、壁面はレンガ積みか平積み、玄室平面形態が長方形を呈して、拡張型の墳丘をもつ石室墳を宗像型横穴式石室墳（以下、宗像型と略）と呼ぶ（小嶋2015・2022など）。古墳づくりを通じた上下階層間での技術共有のもと、両者の意匠・技術を統合させた型式群で（太田2022）、MT15～TK10型式期頃に首長墓に採用され、ほどなく傘下にも浸透する。ところがTK209型式期以降では、下位階層墓は「宗像型の古墳建築技術を軸に石室規模を縮小化する古墳」と「筑紫型の古墳建築技術を軸に石室規模を縮小化する古墳」に二分され（小嶋2018aほか）、7世紀後半になると群集墳の石室が単葬化して造墓が終了する（花田1991）、

あるいは古墳時代後期の群集墳の築造が停止して、7世紀中ごろに新たに「密集型群集墳」(辰巳 1983)を形成し、中央政権の強い造墓規制がはたらく(田村 1999・2009)。この時期になると首長墓でも墳丘・石室に宗像型からの脱却がみえはじめ、前方後円墳の築造停止後の最上位首長墓である手光波切不動古墳や宮地嶽古墳に横口式石槨の要素が取り入れられることで(小嶋 2018b、下原 2014)、脱却の動きが一層顕著となる。

(2) 須恵器・土師器と供献方法の変化

須恵器は今日までに主要な窯跡の調査や採集資料の報告が続き(花田 1990・2002、太田 2023 など)、最近では地域性の抽出で畿内陶邑窯跡群に同調せず半ば独自の交流回路をもつことがわかり(太田 2020)、その生産が在地の支配者層による部民制的な生産形態によるものと認識される(足達 2022 など)。宗像系の須恵器は属性の一部に古い様相が残る壊身・壊蓋(木村 2009)や須恵器甕(太田 2020)、脚付甕(太田・椎葉 2020)や脚付大型短頸壺(太田 2016)が特徴的で、いずれもⅢ B 期ごろに盛行するが、V 期ごろに衰退する。また、7世紀後半以降に沖ノ島祭祀で用いられる沖ノ島系祭祀土器群も他に例がなく特異で、その祖形は在地の須恵器とされるから(太田 2023・小嶋 2023 ほか)、古墳時代以来のデザインが7世紀後半以降も一部では引き継がれる事例もある。一方、土師器は緻密なミガキ調整や小型の円形穿孔のような古い様相を残す「高壊 Ea 類」が宗像地域に多いことが見出された(重藤 2009、小嶋 2012)。その他、石室への土器副葬が極めて少なく(重藤 2010)、むしろ6世紀代は墳丘や前庭部へ供献しがちで、7世紀になると石室内への持ち込みが増加する(小嶋 2012 など)。

(3) 問題の所在

最近では抽出された宗像系文物の分布範囲から、より具体的に地域間交流の様相を把握する機運がある(小嶋 2012、太田・椎葉 2020 など)。しかし6世紀末以降だと、前方後円墳体制から新たな造墓秩序への変化に始まる列島規模での変革のあおりを受けて、保守性の強い宗像系文物は徐々に衰退したり新

たな要素と折衷するため、分布論に必要な宗像系文物の抽出が難しい問題がある。もちろん、先述した通り各分野で相応の成果も上がっているが、これらがどう有機的につながるのかを含めて総体的な検討を積み重ねて、研究の確度を底上げすることも必要と考える。そこで、本稿では古墳や土器、土器の使用方法も含めて属性レベルでできるだけ詳細に検討して、より正確に内容を把握し、あわせて社会的な背景についても考察する。

なお、7世紀代では横長や長方形無袖の小石室群が一帯で盛行するが(西田 1994)、これらまで加えると量が膨大になるため、次回以降の検討に回す。

(4) 方法

対象資料は、Ⅲ B 期以降の旧宗像郡⁽²⁾(宗像市・福津市)の横穴式石室墳と出土須恵器・土師器とする。横穴式石室墳は、個々の属性がもつ情報を正確にくみ取るため、太田宏明氏や小嶋氏の視点を参考に、古墳の諸属性を石室の空間デザインにあたる「意匠的属性」と、これを実現するための「技術的属性」に分けて整理し(太田 2016、小嶋 2015)、各々の属性の展開・系譜を検討する。その後、各属性の相関から型式を設定して、これらの共有関係から系統を設定する。また、石室内外から出る須恵器・土師器の出土状況や器種組成を整理して、古墳の各型式との相関を明らかにする。同時に宗像系須恵器・土師器の消長を整理して、最後にこれらがどう運動しながら展開・消滅してゆくのかを明らかにする。

3. 宗像型横穴式石室墳の検討

(1) 各属性の検討と型式の設定

ア) 各属性の検討(図 1～図 12: 表 1)

ここでは意匠的属性の平面と立面形態、技術的属性の袖部、前壁、墓壙掘削、墳丘構築を取り上げて、各属性の変化・系譜等を先行研究も踏まえて検討する。なお、今回は客観性を担保させるため、石室内の石積みは検討していない。

まず平面形態は土井基司氏や重藤輝行氏らの

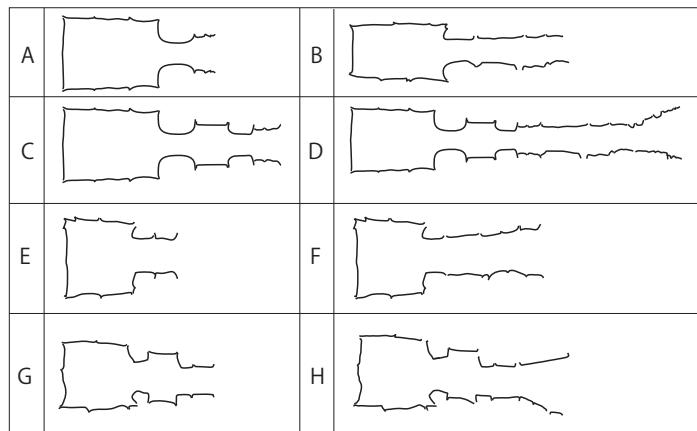


図1 平面形の分類

A	縦横比 1.3 以上、両袖・单室、短羨道または無羨道
B	縦横比 1.3 以上、両袖・单室、玄室長以上の羨道
C	縦横比 1.3 以上、両袖・複室、短羨道または無羨道
D	縦横比 1.3 以上、両袖・複室 玄室長以上の羨道
E	縦横比 0.8 ~ 1.29、両袖・单室、短羨道または無羨道
F	縦横比 0.8 ~ 1.29、両袖・单室、玄室長以上の羨道
G	縦横比 0.8 ~ 1.29、両袖・複室、短羨道または無羨道
H	縦横比 0.8 ~ 1.29、両袖・羨道、玄室長以上の羨道

表1 平面形の分類基準

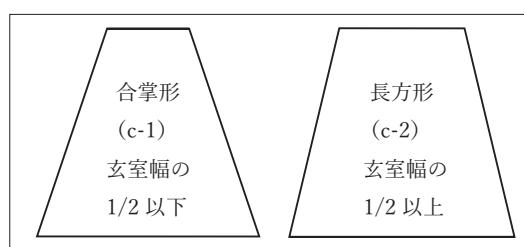


図2 横断面の分類

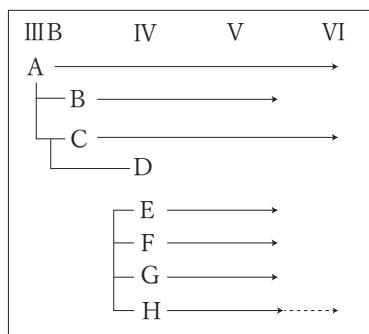


図6 玄室平面の変遷

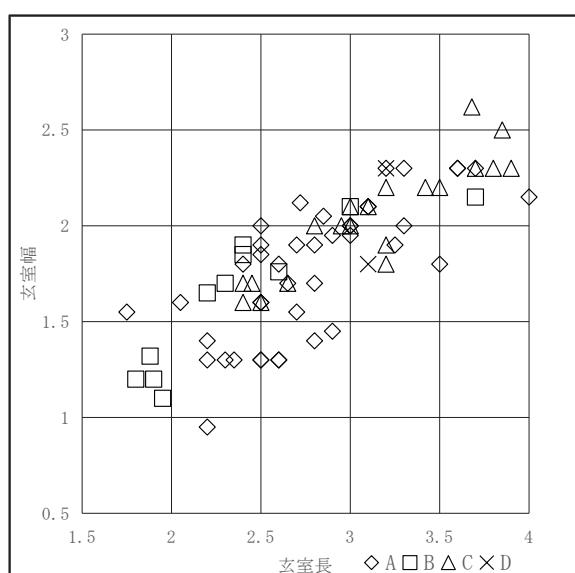


図3 玄室平面の比較 (A ~ D)

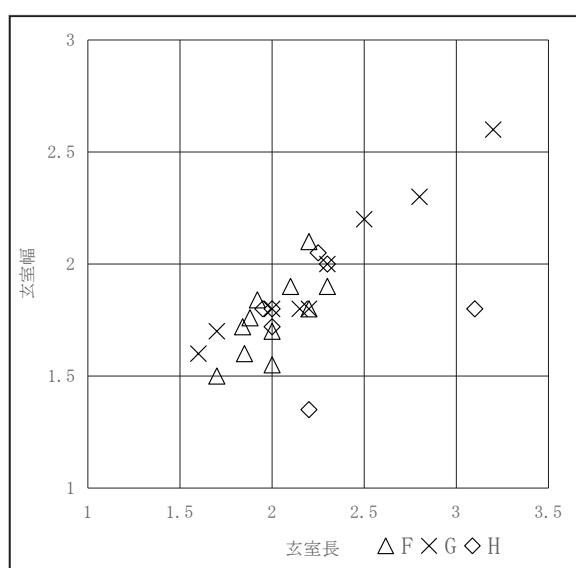


図4 玄室平面の比較 (E ~ H)

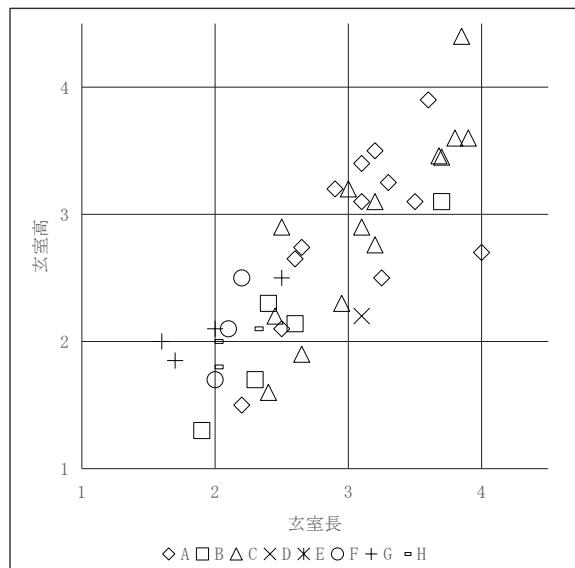


図5 玄室長と玄室高の関係

基礎研究の段階で形態・規模が時間や階層差、地域差を示すことが分かっており（重藤 1999、土井 1992 など）、本稿では図 1・表 1 のように分類した。立面形態は、宗像地域では合掌型天井が多く、図 2 のように大別する。次に各分類と各部法量の相関をみる。まず平面 A は前稿（太田 2022）のとおり初期横穴式石室の系譜を引くもので、Ⅲ A 期には既に存在する。この A と他を比べると、長方形プランの A～D とも規模は大小様々だが近似した縦横比をとる（図 3）。また、玄室高は玄室規模に応じて変化して図 5 のようになり、断面形態も D を除き合掌型天井主体である。したがって玄室だけみれば 4 者は規格性が高く、B～D は A の影響が強い。ただし、長羨道を特徴とする B はⅢ B 期の須恵クヒノ浦古墳等でみられるものの、宗像では定着しない。宗像地域では逆に短い羨道に地山を U 字に掘削した墓道が接続する例が主流だから、長羨道自体は他地域からの情報伝播とみるのが妥当だろう。同様に、複室構造も肥後などの他地域からの情報伝播で在地の技術で築いたものである（柳沢 2003）。以上から玄室の規格は 4 者ともに共有関係にあり、B～D は A の玄室規格をもとに新規の情報を加えて創出したものである。

一方、方形プランの E～H は図 4 のように元々方形を志向するので規格性が高い。さらに玄室長と玄室高の関係（図 5）も、図を見る限り長方形プランよりも規格性が高い。

墳丘規模と玄室長の比較では、長方形プランの A～D は直径 20m 以下の中小古墳で採用されつつ、20m 以上の大型墳にもよく使われ、墳丘規模に比例して石室規模も大型化する（図 7）。これらは図 3・5 でみたように共通の玄室規格なので、長方形プランは階層問わずに普及して、階層差は墳丘・石室規模に反映される。一方、方形プラン E～H は首長墓の事例が不足するため不明だが、図 7 をみるとかぎりは少なくとも墳丘と石室は長方形プランと同様に比例するようである。

この方形プランの E～H はⅢ B 期以来の長方形プランから派生したとは考えづらく、むしろ筑紫型横穴式石室墳（小嶋 2022）のような他地域からの

伝播と考えられる。

以上から A～H は、①平面・立面形態は長方形・方形プランごとに一定の規格が存在する。②長方形プランの玄室規格は階層を問わず共有されている反面、③墳丘と玄室規格は比例しており、階層差を示す。古墳の時期からおおむね図 6 のような流れとなる。

技術的属性のうち、前壁は図 8 のように分類する。前壁は北部九州全域で時間とともに低くなるほか（土井 1992 など）、宗像地域のⅢ B 期では玄門部高が低く相対的に前壁が高いので（小嶋 2015）、概ね z-1 → z-3 の流れとなり、前壁の形態差は時間を反映しやすい。

墓壙は図 9 のように分ける。深さが天井石に迫るもの（b-1・b-2）がⅢ B 期までみられるが、Ⅳ 期以降では浅くなった b-3 が一定数みられるので、b-1・b-2 → b-3 の流れとなる。このうち b-1 は宗像型の特徴である（小嶋 2012 ほか）。b-2 もⅢ B 期から一定数あるので、b-1 がくずれたものと捉えられるが、「腰石の巨石化に伴う技術上の時系列変化としても把握できる」場合もある（津曲 2004、小嶋 2018b）、墓壙の深さのみでは即断できない。b-3 はⅣ 期以降に増加している点等からも宗像型の技術系譜ではない。

墳丘は最近追従不可能なほど詳細な検討が行われるが（小嶋 2022）、本稿では対象資料が多いので一次・二次墳丘（h-1）と一次墳丘のみ（h-2）に大別する（図 10）。Ⅲ B 期からⅣ 期までの場合は h-1 主体で、Ⅳ 期以降から石室・墳丘の縮小化に合わせて h-2 主体となる。なお、h-1 は後述するように 1 次墳丘の裾部で土器を供献したのち、二次墳丘を盛る場合が多い。

次に袖部は図 11 のように分ける。このうち s-1・s-2 は宗像地域の特色で、いずれも側壁基底石上端の横目地がそろうように幅広の袖部基底石を設置し、上部に石を積む。側壁基底石は徐々に大型化する（土井 1992）、基本的には s-1 から s-2 へ変化し、数を減らしながら V・VI 期ぐらいまでは続く（図 12 上）。一方、Ⅳ 期以降には横幅が狭い立柱石状で、側壁基底石上端と横目地が通る s-3、側

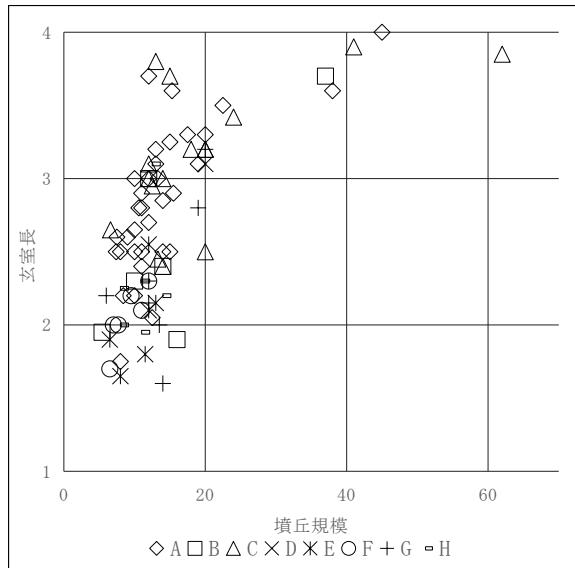


図7 玄室長と墳丘の関係

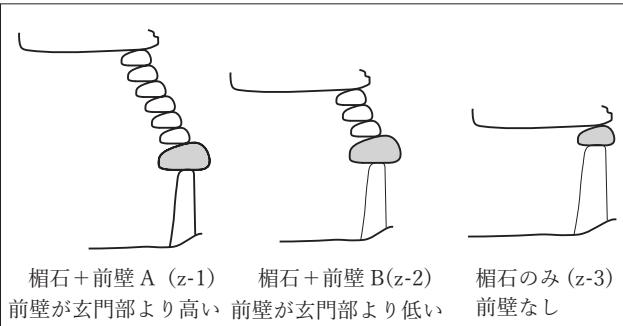


図8 前壁の分類

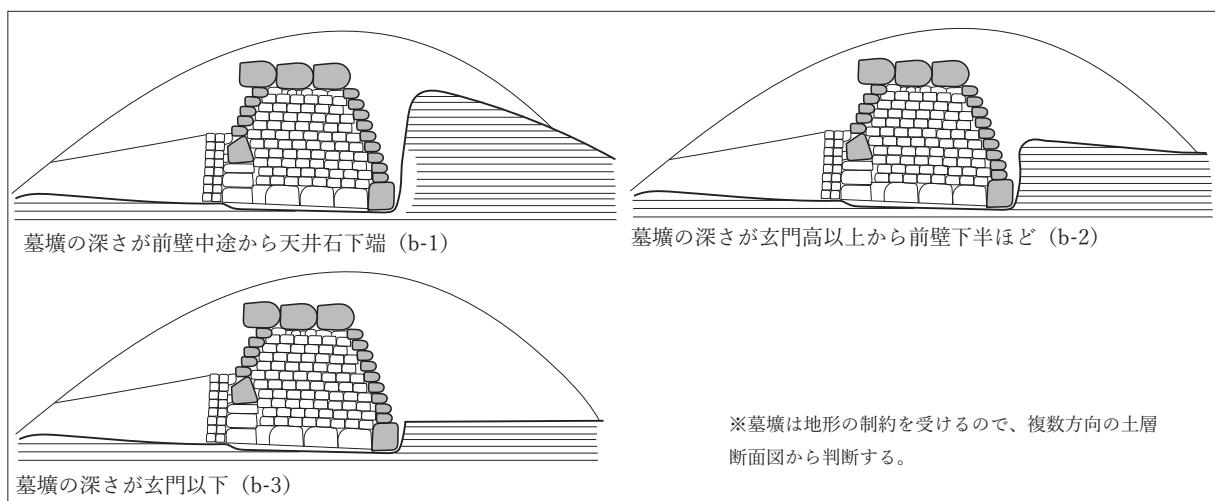


図9 墓壙の分類

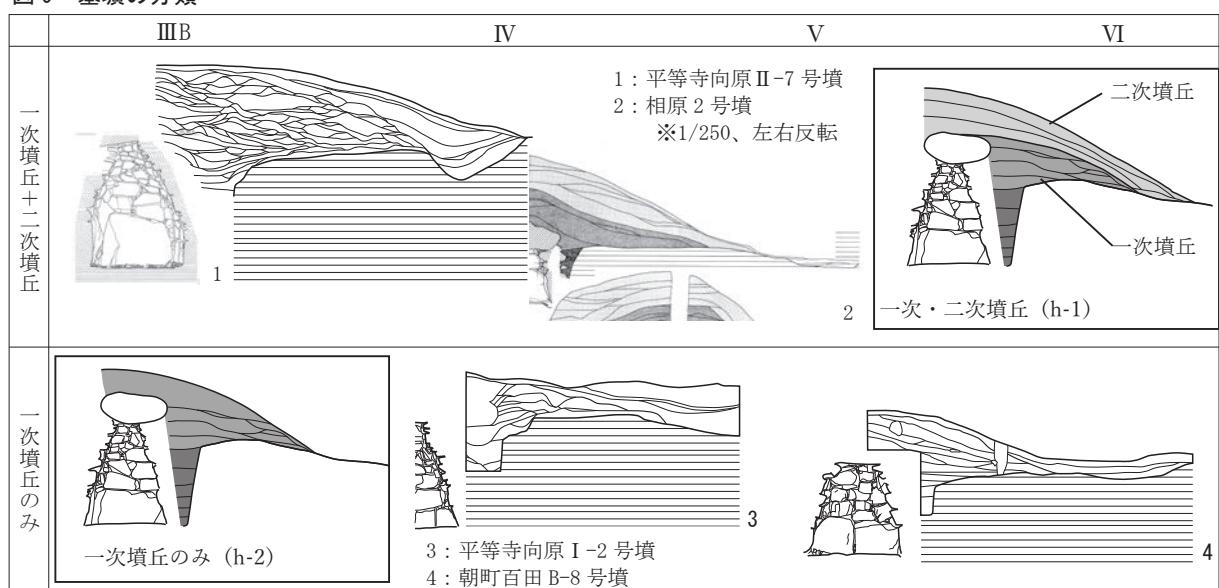


図10 墓壙と墳丘の変遷 (s=1/100)

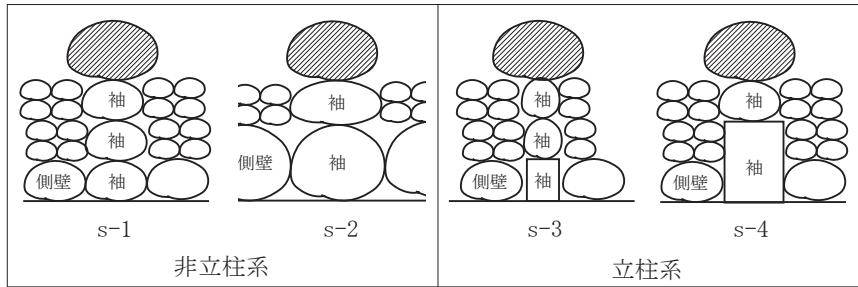


図 11 袖部の分類

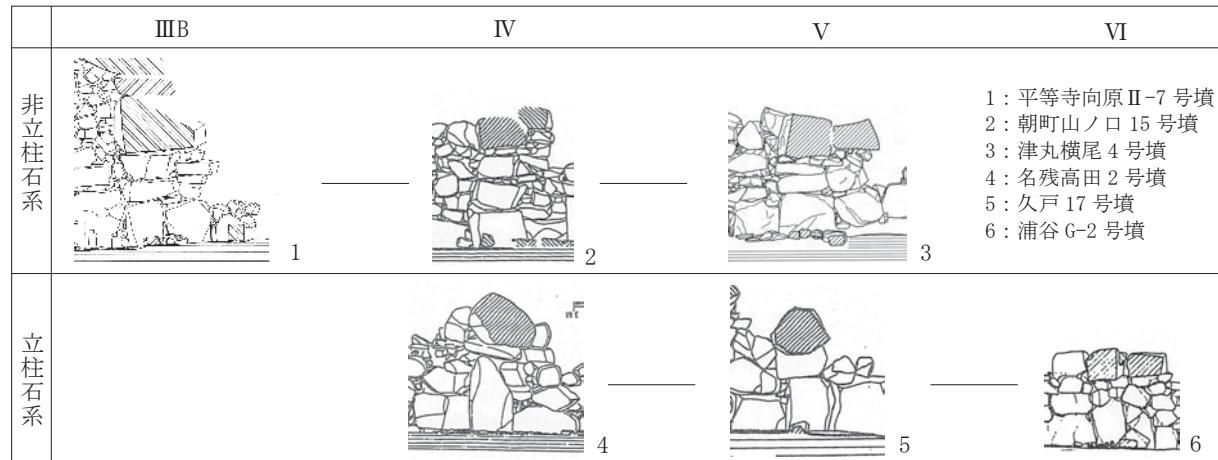


図 12 袖部の変遷 (s=1/100)

壁基底石上端の横目地より高い s-4 が展開する (図 12 下)。これらは IV 期から増加し、両者とも VI 期もある。外来の玄室方形プランとの組合せも多いため、周辺地域でありふれた立柱石が祖形となる。

イ) 型式の設定とその特徴 (図 13 ~ 14、表 2)

以上の各属性の対応関係を表 2 に示した。設定した型式は以下の通りである。

III-2 類 (図 13-1 ~ 4) : 平面は長方形で单室両袖。羨道が短いか備えず、これに地山を掘りこんだ墓道が続く。前壁は玄門部よりも高く、合掌形天井をもつ。墓壙は最低でも前壁下半部ほどまで堀り、墳丘は裏込め盛土後に一次・二次墳丘を構築する。袖石が非立柱系の III-2a 類と、立柱系の III-2b 類に分かれる。また、相原 16 号墳 (図 13-2) のように石室規模が著しく小さく、前壁もほぼ形成されていないものも少数だがみられる。完存例が少なく分類するのをためらうが、一応これらを III-2a (後) または III-2b (後) として区別して、今後の資料増加に備えておく。

III-3 類 (図 13-5 ~ 6) : III-2 類の構造に長羨道を

もち、墓壙掘削は III-2 類よりも浅い場合が多い。袖石が非立柱系の III-3a 類と、立柱系の III-3b 類に分かれる。また、浦谷 D-12 号墳 (図 13-6) のように石室規模が著しく小さく、前壁もほぼ形成されていないものも少数だがみられる。資料がごく少数で分類するのをためらうが、一応これらを III-3a (後) または III-3b (後) として区別して、今後の資料増加に備えておく。

IV-1 類 (図 13-7 ~ 8) : 平面は長方形で、拡幅型の複室をもち、羨道が短いか備えず、これに地山を掘りこんだ墓道が接続する。前壁高は玄門部高と同程度か、やや高い例が多く、合掌形天井である。墓壙は最低でも前壁下半ほどでの深さで、墳丘は二次墳丘まで盛る。袖石が非立柱系の IV-1a 類と、立柱系の IV-1b 類に分かれる。また、久戸 15 号墳 (図 13-8) のように石室規模が著しく小さく、前壁もほぼ形成されていないものも少数だがみられる。資料がごく少数で分類するのをためらうが、一応これらを IV-1a (後) または IV-1b (後) として区別して、今後の資料増加に備えておく。

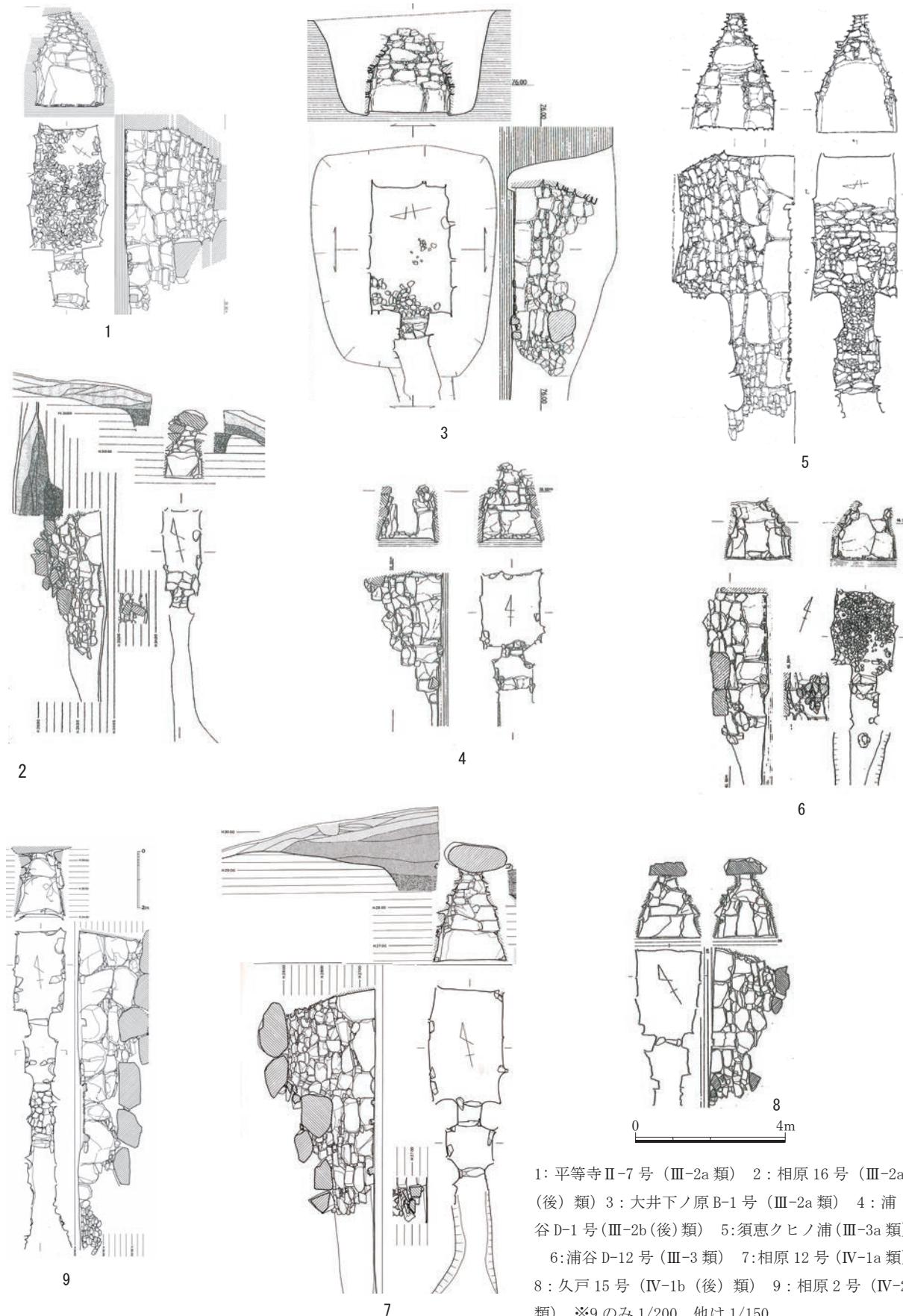


図 13 各型式①

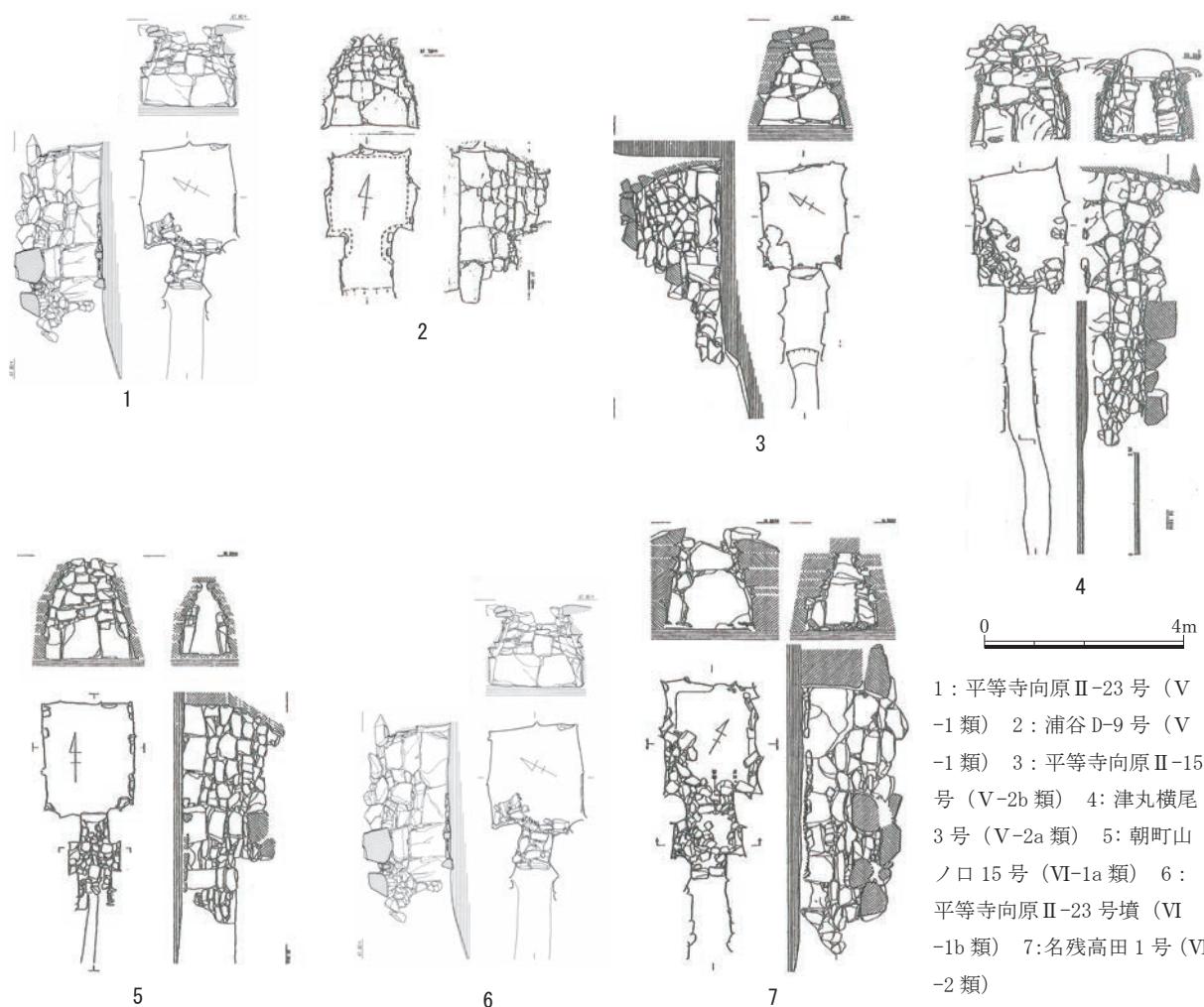


図14 各型式②

	玄室 平面	断面 (c)		袖石構造 (s)		前壁 (z)		墓壙 (b)			墳丘 (h)		時期
III-2a	A	合掌	1	非立柱	1・2	玄門高 < 前壁高	1	前壁下～上半部以上	1・2	1・2次	1	III A～IV	
III-2b				立柱	3・4								III B～VI?
III-3a	B	合掌	1	非立柱	1・2	玄門高 > 前壁高	2	前壁下半部以下	2・3	1次	2	III B～V	
III-3b				立柱	3・4								
IV-1a	C	合掌	1	非立柱	1・2	玄門高 < 前壁高	1	前壁上半部以下	1・2・3	1・2次	1	III B～IV	
IV-1b				立柱	3・4								IV～VI
IV-2	D	長方	2	立柱	3・4	混在		—	—	—	—	—	IVB～
V-1	E	—	—	立柱石	3・4	—	—	棺石から前壁下半部	2・3	1次	2	IV～V	
V-2a	F	合掌	1	非立柱	1・2	玄門高 > 前壁高	2		2・3	1次	2	IV～	
V-2b				立柱	3・4								IV～V
VI-1a	G	—	—	立柱	1・2	玄門高 > 前壁高	2		2・3	混在	1 2	IV～V	
VI-1b				非立柱	3・4								
VI-2	H	合掌	1	立柱	3・4	玄門高 > 前壁高	2・3		2・3	混在	2	IVB～	

表2 各型式の属性

IV-2類(図13-9):IV-1類に長羨道がつき、玄室横断面が長方形で、袖部が立柱系の一群。

V-1類(図14-1~2):玄室平面が方形で、羨道がないか短い。玄室断面は後述するV-2類から断面合掌形で、前壁も玄門部高よりも低いとみられる。墓壙は前壁下半部ほど掘削するが、これより浅い場合もある。墳丘は1次墳丘のみの場合が多い。袖石は立柱系が主体である。

V-2類(図14-3~4):V-1類に長羨道がつく。墳丘は1次墳丘主体である。袖石が非立柱系のV-2a類と、立柱系のV-2b類に分かれる。

VI-1類(図14-5~6):平面が方形プランで、拡幅型の複室をもち、羨道は短いかない一群。前壁は玄門部高より低く、墓壙は玄門より深く掘削する。墳丘構築技術は統一性がない。袖石が非立柱系のVI-2a類と、立柱系のVI-2b類に細分する。

VI-2類(図14-7):VI-1類に長い羨道がつくもの。

(2) 系統の設定と宗像地域における古墳の変遷

各型式を構成する属性の共有関係を図15に示した。先に検討した属性の系譜から、次のような系統に分類できる。

宗像型横穴式石室墳:玄室平面、立面や袖部、前壁など、宗像地域の伝統的な石室構築技術を主体とする。その出現は首長墓と中小古墳の古墳築造技術が統合されたIII-1類とIII-2a類を契機とし、III B期に増加する。ほどなく複室の情報伝播を契機にIV-1a類も出現し、普及する。この時期では久原II-3号墳や桜京古墳等の首長墓から、中小古墳まで広く浸透する。しかしIV期以降の首長墓では使われなくなり、中小古墳でも採用例は激減し、IV B期を最後に消滅する。

宗像系横穴式石室墳A系統:玄室平面・立面は在地系の長方形プランだが、技術的には在地系と非在地系が混在する。中でも非立柱系の袖部、深い墓壙掘削など、在地系の構築技術が相対的に多い石室群と立柱系の袖部など在地系の構築技術が少ないものに分かれそうだが、小差で明確ではなく以下見通し程度に言及しておく。

まず前者はIII-3a類とIII-2a(後)のみ該当する。

この中で首長墓の須恵クヒノ浦古墳(III B期新段階)のほか、飛塚1号墳例のような中小古墳にも採用される。その後、清田ヶ浦6号墳、須多田立石1号墳例のようにV~VI期まで細々と存続する。

後者はIII-2b・III-3b・IV-1b・IV-2類が該当する。III B期の段階ではごく一部に採用例がみられるが(新原・奴山4号墳、III-2b類)、主にIV期から増加する。また、III-2b・IV-1b類は朝町百田A-1号、久戸18号、浦谷G-2号などからV~VI期ごろまでは存在する。注目されるのがIV-2類で、相原2号墳や池田桜B-3号墳など、IV期にかけての首長墓に採用されることが多いが、中小古墳への採用は限定的である。

宗像系横穴式石室墳B系統:玄室平面は外来形の方形プランだが、技術的には在地系と非在地系が混在する。中でも非立柱系の袖部、深い墓壙掘削など、在地系の構築技術が相対的に多い石室群と立柱系の構築技術など、在地系の構築技術が相対的に少ない石室群に分かれそうだが、やはり小差で明確でない。

まず前者はV-2a・VI-1a類のみが該当する。平等寺向原I-2号墳例や津丸横尾3号墳例のようにIV期以降を中心とするが、少数であり定着していない。VI-1a類も、IV期を中心に普及するが、V期の資料は見られない。したがって、B-1系統はIV期からV期の比較的短期間にみられる。

後者はV-2b類とVI-1b類、VI-2類が該当する。V-2b類はIV B期の平等寺向原II-15号墳等が初現で、その後はV期の浦谷D-3号墳に引き継がれるが、少数で定着していない。VI-1b類は平等寺向原I-1号墳や名残高田1号墳のようにIV B期を初現とし、平等寺向原VIII-2号墳のようなV期の資料を最後にVI期には見られなくなる。VI-2類は資料が少ないが、IV B期のみである。

以上から、宗像型横穴式石室墳はIII B期からIV期までの比較的短い期間に築造されるが、割と短期間で衰退する。IV期になると在来系の系譜を引くA系統と、外来形の意匠的属性をもつB系統に枝分かれし、V~VI期ごろまでは両者とも併存する。

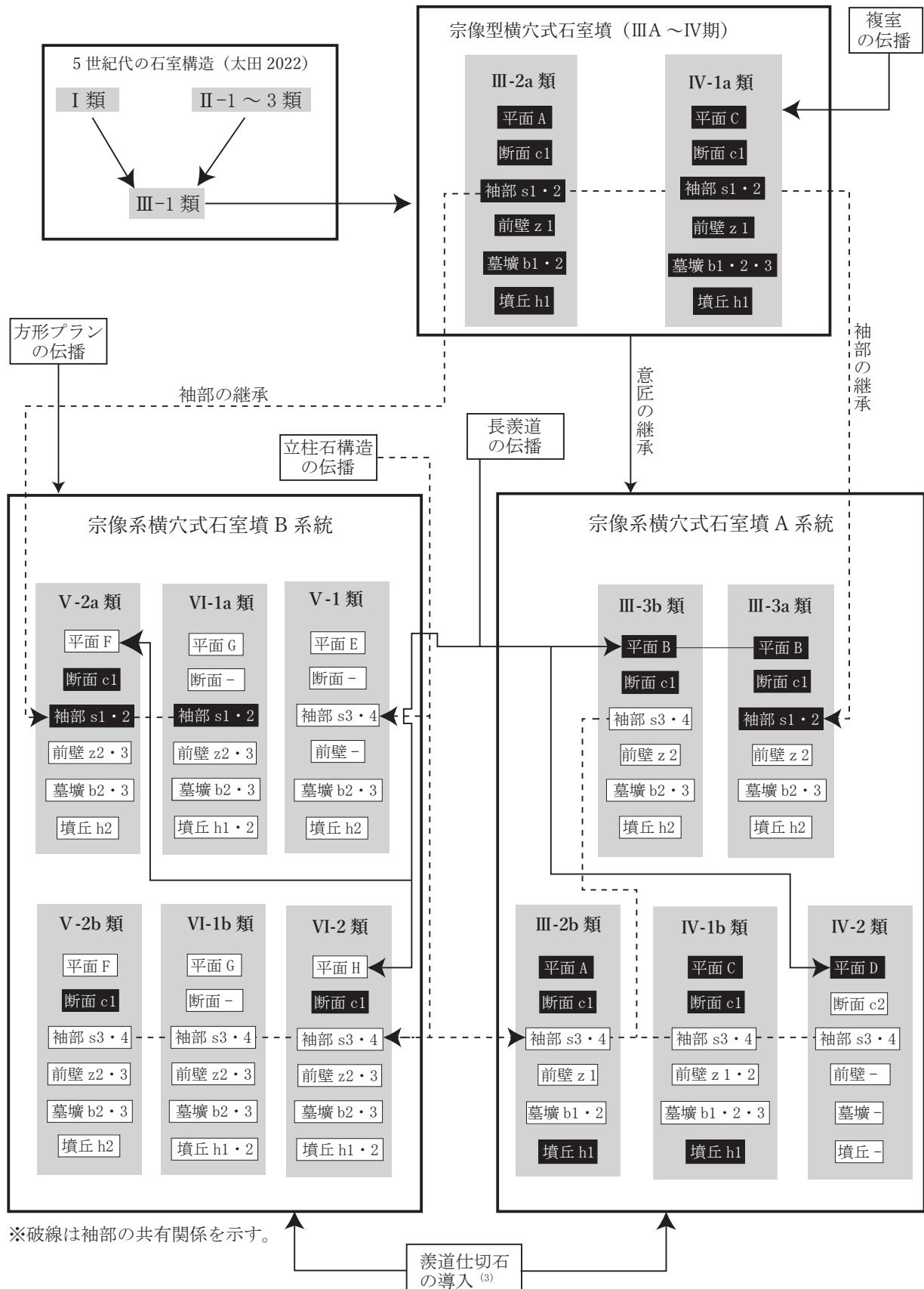


図 15 各型式の共有関係

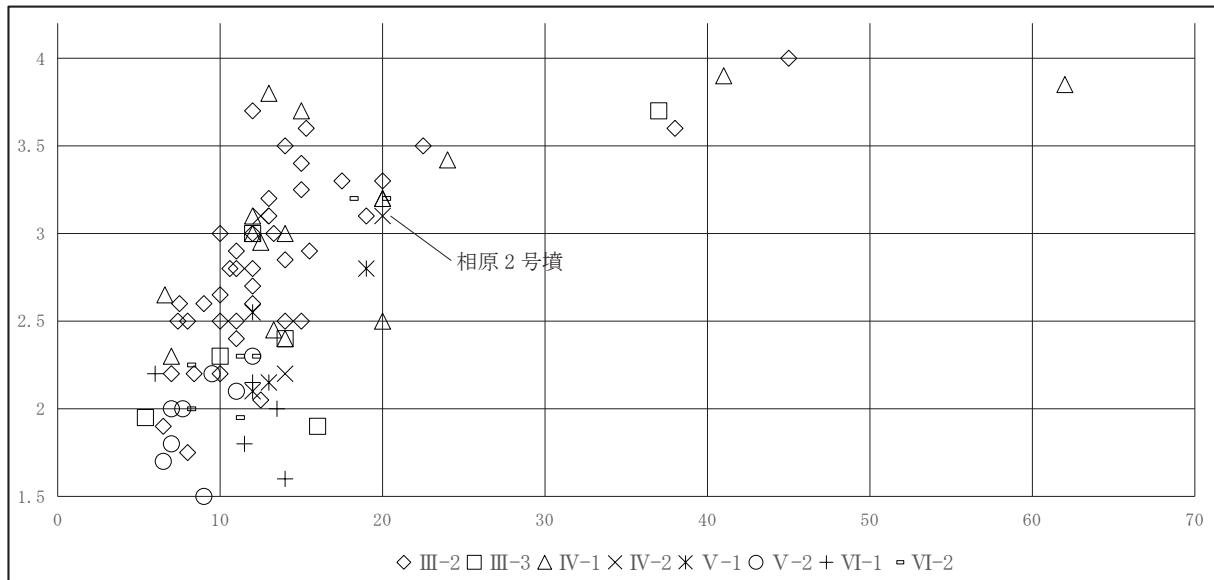


図 16 各型式と階層（縦軸は玄室長、横軸は墳丘規模を示す）

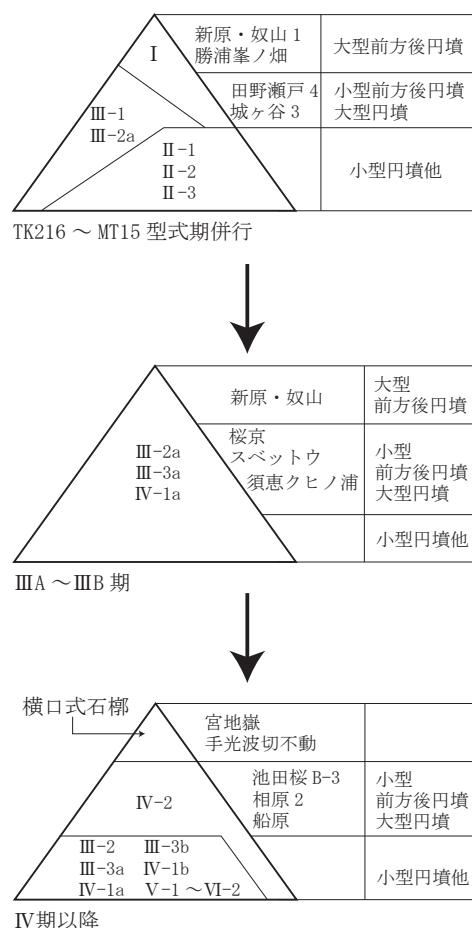


図 17 階層と石室構造の対応関係

(3) 石室構造と階層関係の変化 (5 ~ 7世紀)

次に各系統・型式と階層との関係を検証する。まず 5 ~ 6 世紀前半に関しては前稿の通り（太田

2022)、勝浦峯ノ畠古墳などの首長墓は I 類、傘下は II 類という状況が続くが、TK47 型式期ごろに両者を統合した III-1a 類が首長墓や中小古墳などに浸透し始める。

III B 期をみると（図 16）、全長 20m 以上の首長墓には III-2a 類、IV-1a 類、III-3a 類などが用いられ、直径 10m 級の傘下の円墳にも浸透する。一方、IV 期になると相原 2 号墳のほか、宗像市域で最大規模の石室をもつ池田桜 B-3 号墳や、今回対象としなかった古賀市船原古墳のように、首長層で IV-2 類石室の採用例が増加する。興味深いのがその後の状況で、IV-2 類は傘下の古墳での採用例はほぼない。また、IV ~ V 期に築造される最上級首長墓の手光波切不動古墳と宮地嶽古墳の存在も同様である。これらは畿内の横口式石槨の影響を受けるが（下原 2014、前田 1994）、やはり傘下へ型式が伝播することはない。

以上を踏まえて、宗像地域での 5 ~ 7 世紀の石室構造と階層構造の関係を図 17 のようにまとめる。ここでは齊藤大輔氏にならい、宗像地域の最上位首長層、そのもとで軍事・生産・外交などを分掌する階層、さらにその下に続く階層に分離する（齊藤 2019）。まず 5 世紀では、TK216 ~ TK208 型式期ごろに勝浦峯ノ畠古墳や新原・奴山 1 号墳のような首長層に I 類（初期横穴式石室）が採用される。これら首長墓の古墳づくりは傘下の集団も参画するが（重藤 2016）、その過程で横穴式石室の情報を持ち

帰り、伝統的な堅穴系埋葬施設に組み込むことでⅡ類を出現させ、中小古墳で流行する。したがってこの段階では首長とその傘下の間には石室構造や墳丘構築技術に大きな差がみられるのを特徴とする（太田 2022）。

それが変化するのがⅢ A 期ごろからⅣ期で、5世紀代から労働・奉仕を介して首長墓から中小古墳への技術共有が通時的に行われた結果、首長墓の意匠と技術をベースに、中小古墳で普遍的だった袖部の構造や深い墓壙などを組み合わせて宗像型の前身となるⅢ-1 類になり、ほどなくⅢ-2a 類が成立する。宗像地域最上位の新原・奴山古墳群の状況は不明だが、田野瀬戸 4 号墳や久原Ⅱ-3 号墳、桜京古墳などの首長墓に採用される一方、浦谷 C-5 号墳や久戸 11 号墳のような中小古墳にも普及する。したがってこの段階では宗像地域内で古墳築造技術の「範型」が階層を超えて広く流布して、石室構造の規格性と共通性の高さがこの段階の特徴といえる。

Ⅳ期以降になると状況は一変する。最上級首長墓では横口式石槨、その下にⅣ-2 類、さらに下に A・B 系統の各類型というように、階層によって石室構造が規定されるような状況になる。特に横口式石槨とⅣ-2 類は前壁や羨道などをみると従来の宗像型から脱却しており、さらに墳丘や墓壙にも宗像型とは異なる要素がみられる（小嶋 2018b）。また、中小古墳の型式群はⅢ B 期に比べて系統・型式の双方で多様性を帯びるようになる。

（4）小結

以上、宗像地域の古墳の変化等を整理したが、要点をまとめると以下となる。

- ①宗像地域ではⅢ B 期以降、古墳は表 2 のように分類でき、これらは「宗像型横穴式石室墳」と、玄室平面が在地系の A 系統と、外来形の意匠的属性の B 系統に分かれる。
- ②このうち「宗像型横穴式石室墳」はⅢ A 期に出現するが、Ⅳ期ごろには衰退し、以降は A・B 系統に代わり、VI期ごろまで併存する。
- ③したがって宗像型は比較的短期間で消滅するこ

とになるが、袖部や平面形態に注目すると、在地系の意匠的・技術的属性はVI期ごろまで存続している点が確認された。

④石室と階層性を見ると、5世紀段階の階層差によって採用する型式が異なる段階から、Ⅲ B 期の階層を超えた規格性・共通性の高い段階、Ⅳ期以降の再び階層によって選択される型式が異なる段階へと変わる。特にⅣ期は前代に比べてはるかに多様性に富んだ石室群を展開させた点で特筆される。これは小嶋氏のいう「範型」（小嶋 2018b）の崩壊と、内的・外的要因による石室構造の変化が主な要因になる。では、これらの変化と土器副葬はどうかかわるのか。次節で検討してみよう。

4. 土器供献方法の検討

（1）石室外での様相（図 18・表 3）

ここではⅢ B 期以降の土器使用方法について検討する。

宗像地域での墳丘内外の良好な調査事例として、大井下ノ原 A-3 号墳、平等寺向原Ⅱ-7 号墳とⅡ-12 号墳、新原・奴山 5 号墳、手光南 2 号墳を取り上げる（図 18）。いずれもⅢ-2a 類やⅣ-1a 類に多く見られ、配置は小嶋 2012 で指摘されている通り墳裾、墳丘内に分かれるほか、石室開口部両側に配置されることが多い。器種組成は表 3 の通りで、壺身・壺蓋・高壺、甕はもちろん、提瓶や壺・甕類などの貯蔵具、土師器高壺等が基本的なセットである。また、大井下ノ原 A-3 号墳をみると、墳丘周囲の 4箇所に土器を配置して、それぞれの場所で須恵器壺身・壺蓋、高壺、甕、土師器高壺等の小型供膳具のセットと、壺、甕のような貯蔵具を配置しており、供献は各所で完結しているような状況である。

（2）石室内における土器の使用状況

一方で石室内はどうか。Ⅲ B 期ではいくつかで石室内出土例がみられるが（表 4）、やはり石室内への土器の持ち込みは定着していない。一方、Ⅳ期になると古内殿 4 号墳や朝町官作 1 号墳、徳重高

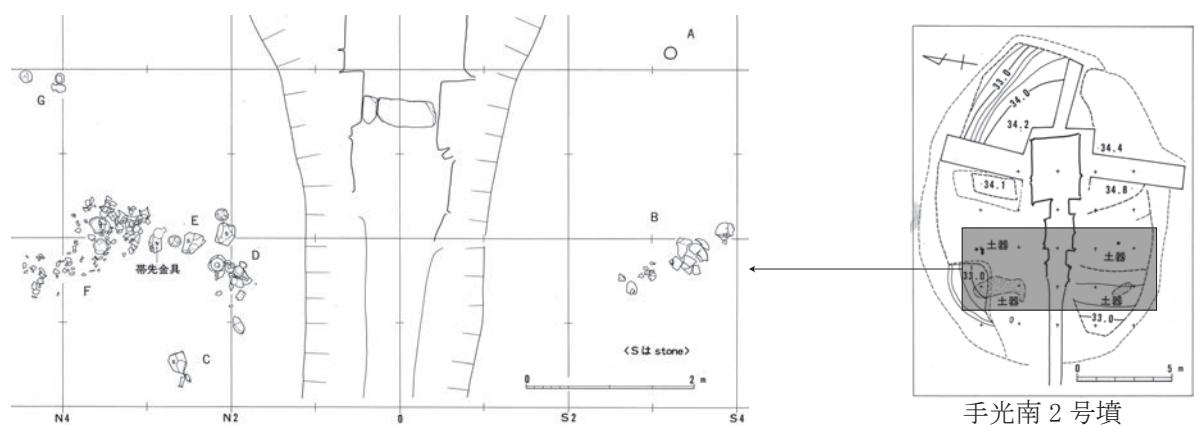
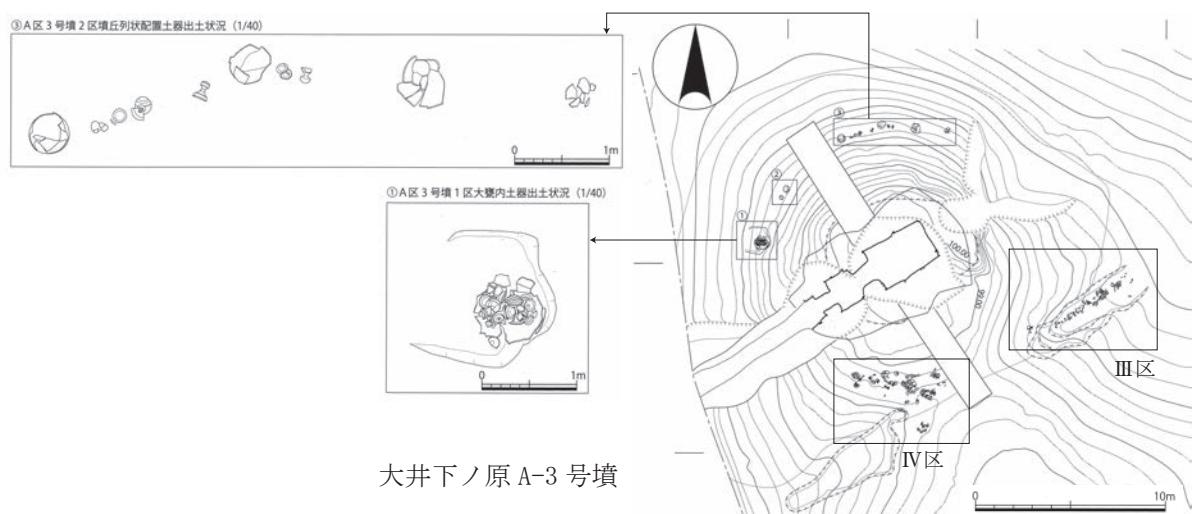
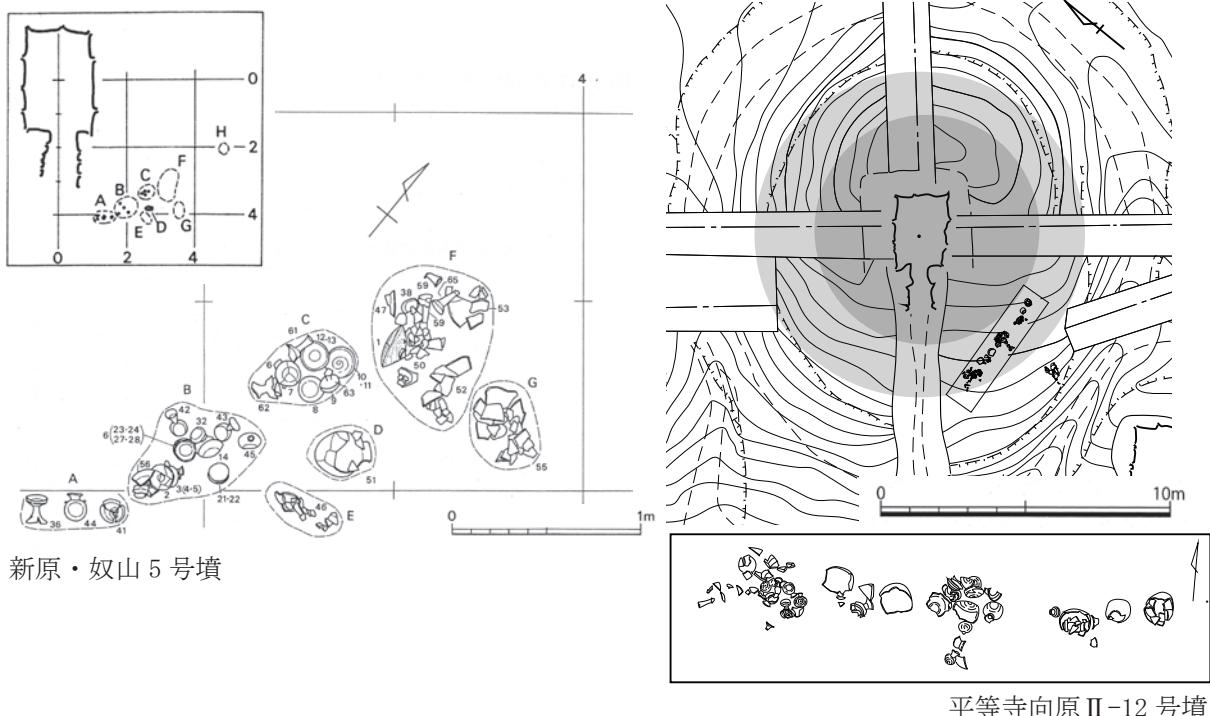


図18 宗像地域における石室外での土器供献

	須恵器													土師器					
	壺身 壺 蓋 高壺 有蓋 無蓋	脚付壺	提 瓶	平 瓶	横 瓶	器 台	短頸壺 (脚付合)	長頸 壺	壺	甕	その 他	甕	壺	高 壺	鉢	壺	その 他		
大井下ノ原A-3号墳																			
I 区墳丘外	2	3	2	4	1		2						1	2		4		1	
II 区墳丘外	2			5	3	2	2		2				1	2		4		1	
IV 区墳丘外	2		4		1	1		1	5	1			3	2		19		2	
III 区墳丘外	4	2		1				1					1	2		5			
手光南2号墳																			
B群													●	●				●	
C~F群				●			●			●			●		●	●			
新原・奴山5号墳																			
墳丘内	9	9		3	1		5						1	2	2	2	3	2	3
平等寺向原II-12号墳																			
墳丘内	5	4		3	2	1	8						2	4			7		

表3 石室外土器供献の組成

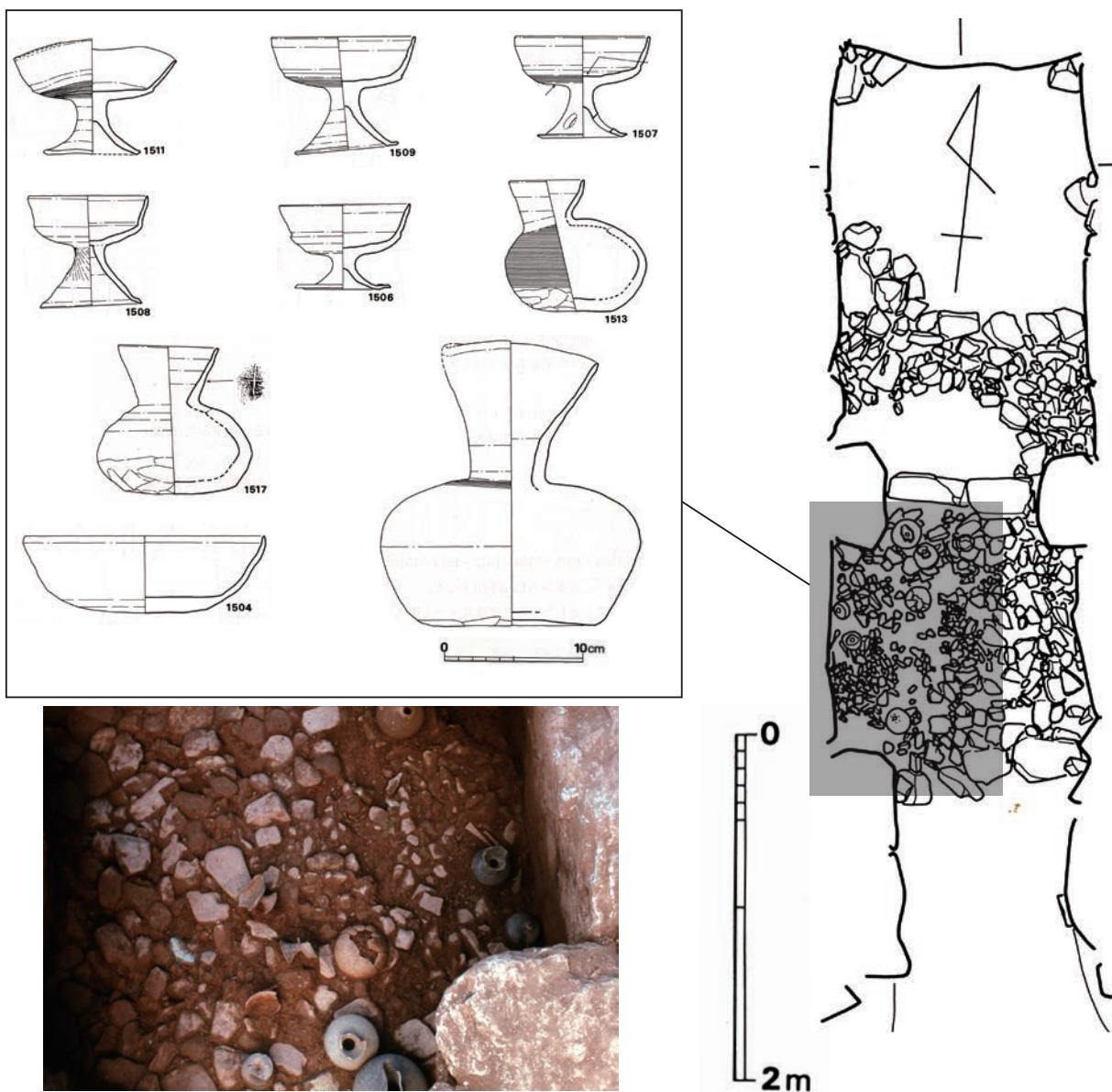


図19 相原15号墳における土器供献

番号	遺構名	時期	分類	器種組成																			
				須恵器												土師器							
				壊身	壊蓋	有蓋 高坏	無蓋 高坏	甌	脚付甌	提瓶	平瓶	横瓶	器台	(脚付) 短頸壺	長頸 壺	壺	甌	他	甌	壺	高 坏	鉢	壊
1	勝浦水押1号墳	III B	IV-1b																	1			
2	大井三倉4号墳	III B	III-3a											1									
3	朝町妙見4号墳	III B	III-2b				1				1											1	
4	古内殿4号墳	IV	V-1b				3				2	3											
5	朝町官作1号墳	IV	-	2							1												
6	徳重高田2号墳	IV	VI-2														1						
7	朝町妙見3号墳	IV	III-2								1										1		
8	徳重高田3号墳	IV	III-2b																			(1)	
9	浦谷D-10号墳	V	-			1	1				3												
10	浦谷D-12号墳	V	III-3b	1							1												
11	王丸長谷2号墳	V	III-3			1					1					1							
12	浦谷H-2号墳	V	-			1										2							
13	相原15号墳	V	IV-1	1		5					2					1				1	1		
14	浦谷F-4号墳	V	V-2b	1							1					1							
15	浦谷D-3号墳	V	V-2b			1																	
16	陵巖寺宇土2号墳	V	-	2		1					1			1									
17	名残高田16号墳	V~VI	-	1		3					3					1							
18	野坂東松元B-2号墳	V~VI	VI-1	1		2										5					1		
19	野坂新田9号墳	VI	VI-2	1							1					1							
20	野坂新田6号墳	VI	V-1a			1					1												
21	浦谷D-2号墳	VI	-	1							4					1							
22	大井下ノ原B-17号墳	VI	V-1			1										2		1					
23	勝浦水押4号墳	VII	-	3	1						1												
24	野坂東松元B-1号墳	VII	V-2	1							1					1							
25	名残高田20号墳	VII	-													1							
26	野坂新田4号墳	-	-													2	1				1		
27	八並中原4号墳	-	-								1												
28	牟田尻桜京A-10号墳	-	III-3b			1																	
29	牟田尻峠A-1号墳	-	III-2								1												
30	平等寺半田B-2号墳	-	-	1																			
31	平等寺半田II-2号墳	-	-								1												
32	朝町百田A-11号墳	-	III-3								1					4							
33	朝町百田A-13号墳	-	-								1												
34	朝町百田A-15号墳	-	III-2												1			1	1				
35	朝町百田A-9号墳	-	IV-1												1								
36	朝町百田A-8号墳	-	V-2												3								
37	平等寺原21号墳	-	-	1		1																	
38	村山田高江3号墳	-	V-2	1											1		3	1			1		
39	浦谷J-1号墳	-	III-3																1				
40	浦谷D-11号墳	-	-												1								
41	浦谷J-2号墳	-	V-2b												1			1					
42	浦谷F-5号墳	-	-			1																	
43	朝町百田B-13号墳	-	-															3					
44	浦谷H-6号墳	-	III-3															3					
45	野坂新田1号墳	-	-																1				
46	名残高田21号墳	-	-												1				1				
47	浦谷F-6号墳	-	V-2	1														2					

表4 石室内土器供献の様相

田2・3号墳など、宗像系A・B系統で主流となる。ただし、この段階の器種組成はバラバラで、一定の傾向はみられない。V・VI期になるとさらに資料は増加する(図19)。無蓋高坏と平瓶・長頸壺が器種組成の中心で、古墳によっては甌や壊身・壊蓋が持ち込まれる。土師器の副葬はほとんどない。

この器種組成は小型供膳具の割合が高い墳丘内外の供献と大きく器種組成が異なるため、少なくとも伝統的な墳丘内外の土器供献がそのまま石室内

へ移植されたとは考えにくく、むしろ6世紀末以降の外部の石室内土器供献の情報が地域内へ及んだものと考えてよい。

(3) 小結

以上の検討からおよそ以下の通りに集約される。
①III B期までは石室内土器供献はほぼ見られず、逆に墳丘盛土内や墳裾からの出土が基本である。これらの事例は宗像型(III-2a・IV-1a類)でみら

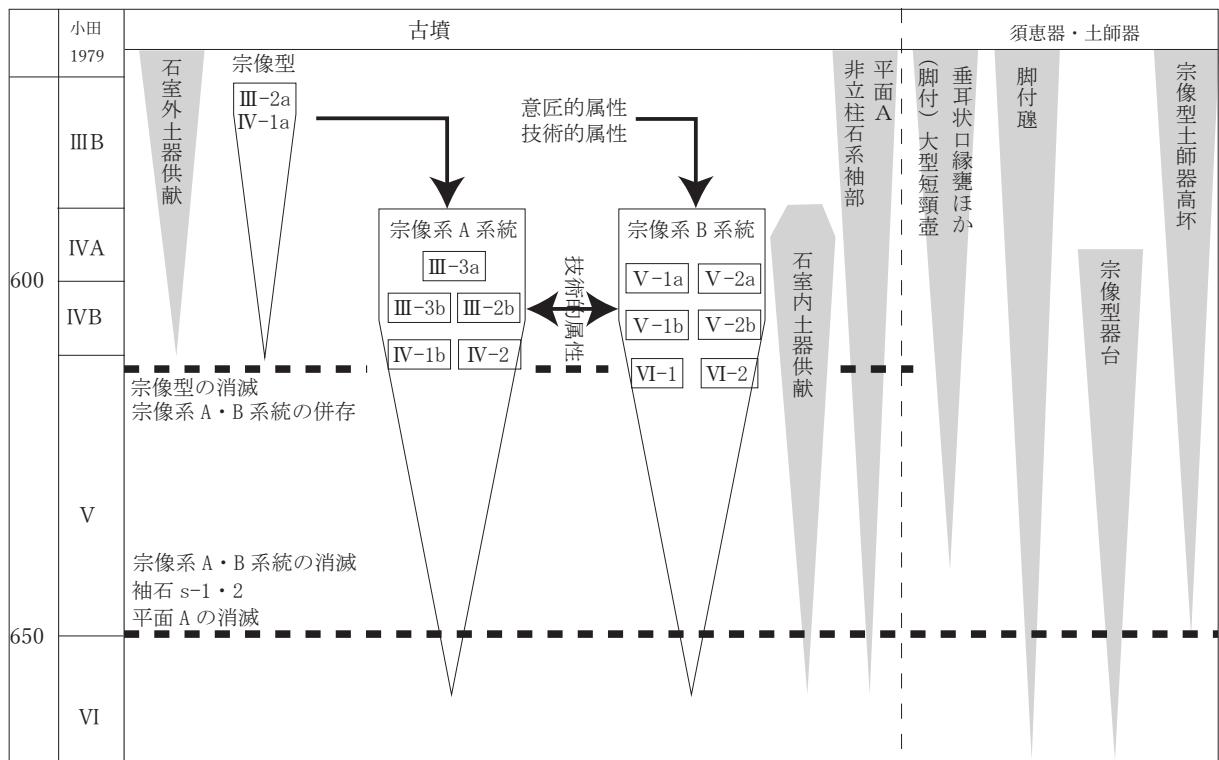


図 20 宗像系文物の衰退過程

れるが、宗像型の消滅にあわせて衰退する。

②墳裾の複数地点で土器のまとまりが確認される場合、器種組成は各々多少の差はあるが小型供膳具と貯蔵具からなるセットをそろえているため、祭祀・儀礼が各地点ごとで完結していた可能性がある。

③墳丘内と墳丘外供献土器群の組成をみると、こちらも器種組成に大差がない。

④一方IV期になると石室内土器供献が主流となり、これらは宗像系 A・B 系統にみられる。組成はIII B 期の墳丘内外の土器群とは大きく異なり、V期では無蓋高坏、平瓶、長頸壺をよく副葬する。このことは石室内土器供献が在地の土器供献からの派生ではなく、主に外的要因のもとに成立した可能性が高いことを示す。

5. 考察

(1) 分析結果の照合

以上、宗像型横穴式石室墳と土器の供献方法の様相を検討した。これに須恵器大型（脚付）短頸壺⁽⁴⁾、須恵器脚付甕⁽⁵⁾、須恵器甕⁽⁶⁾を加えると図 20 のようになる。これをみると、まずIV期ごろに宗

像型（III-2a 類、IV-1a 類）と墳丘での土器供献が同時に減少し始め、遅くとも V 期には消滅する。一方、IV 期には宗像型の意匠をもつ宗像系 A 系統と、外来的な意匠をもつ B 系統が出現し、宗像型にとつて代わる。この A・B 系統の段階から石室内土器副葬が主流となり、以後 V 期ごろまで安定し、両者が消滅することで宗像系も終焉を迎える。また、細部の属性に注目すると、宗像系の平面形態や袖部の構造なども V・VI 期くらいまで存続しており、宗像型の影響がしばらく続くことがわかる。

次に須恵器・土師器をみると、垂耳状口縁甕や（脚付）大型短頸壺等は V 期を最後に消滅する。土師器高坏 Ea 類は詳細不明だが、少なくとも石室内に副葬することがないから、V 期ごろには消滅するだろう。したがって、古墳・土器などはおおむね IV～V 期ごろにこれらの変化が同時期に連動している。次にこの変化の要因を考える。

(2) 6世紀末から7世紀にかけての変化と背景

ア) 6世紀末から7世紀前半の情勢

以上のように、宗像地域では IV 期以降、保守的だった宗像系文物が徐々に変容衰退してゆく過程

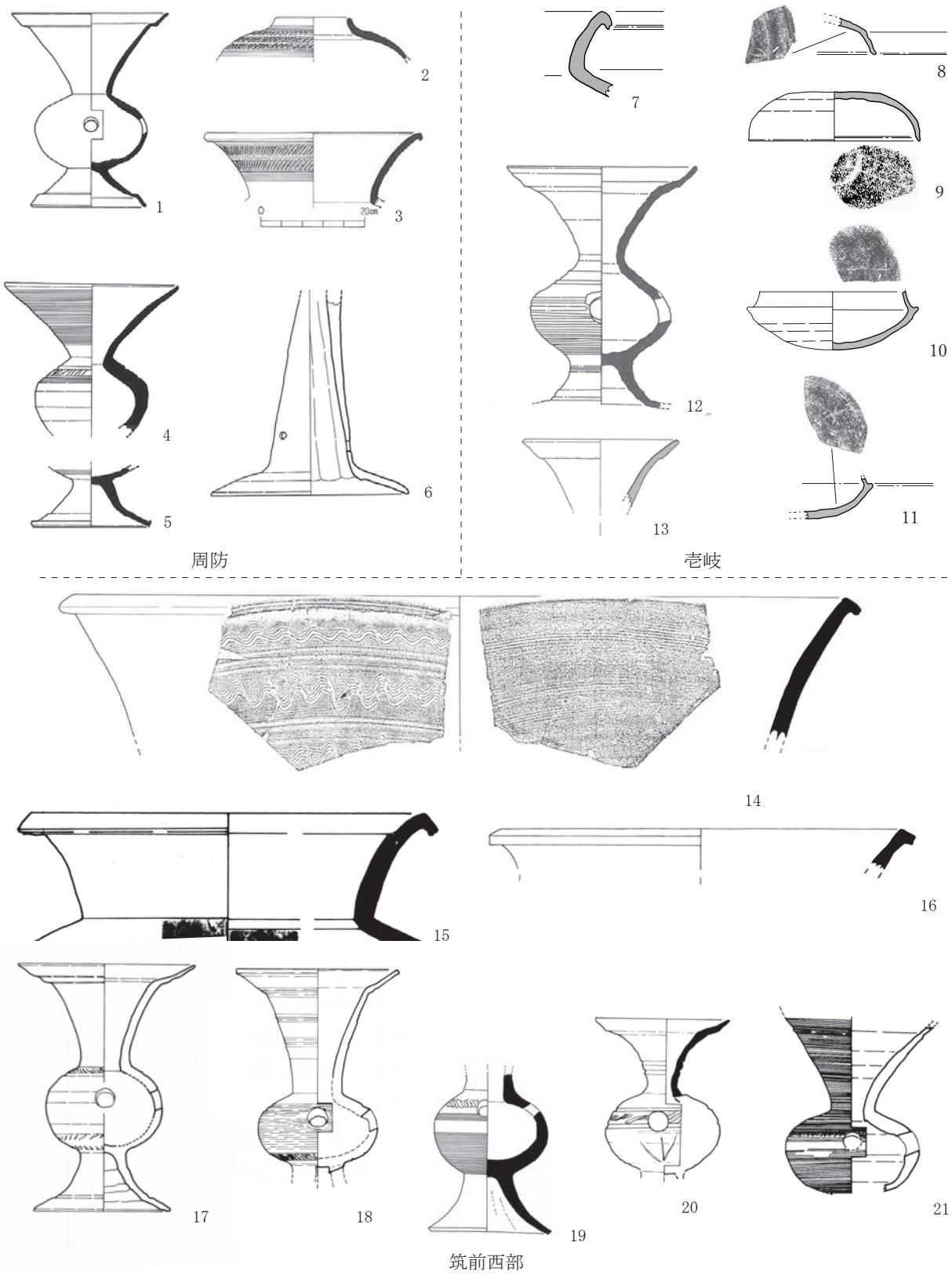


図 21 他地域の宗像系文物

1: 大浦 8 号 2・3: 梅ヶ崎 9 号 4 ~ 6: 大浦 12 号 7: 百田頭 2 号墳 8 ~ 11: 石路 B 遺跡
 12: 鬼の窟古墳 13: 対馬塚古墳 14・21: 元岡石ヶ元 6 号 15: 吉武塚原 8 号 16: 広石 VIII-1 号
 17: 徳永 H-15 号 18: 徳永 H-10 号 19: 元岡 J-1 号 20: 金武 G-1 号

0 15cm

が追認された。その原因については各分野で様々な指摘があるが、ここでは最近田中史生氏や小嶋氏が指摘する、6世紀末から7世紀前半にかけての玄界灘沿岸部にかけての動向に注目する。

『日本書紀』推古天皇十年二月己酉朔条（602）には、対朝鮮半島情勢をにらみ来目皇子が筑前国嶋郡に駐留した記事がある。田中史生氏は、「諸神部及国造・伴造等、幵軍衆二万五千人」程の大軍勢を維持するため、来目皇子の軍勢に加わる船舶・軍糧の集積には各地に分散するミヤケをまとめる那津官家が大きな役割を果たしたと指摘する。この那津官家は遠方の河内の茨田郡屯倉からも、瀬戸内や宗像を通る海上交通路を通ってもたらされており、こうしたミヤケ制の基盤と、来目皇子の駐留というイベントを通じて、中央と宗像を含む北部九州諸勢力の関係がさらに強化されたという（田中 2002・2023）。上記の指摘に関して、ほぼ同時に小嶋氏もIV期ごろの各方面での変化を「国造軍」の面から論じており（小嶋 2023）、国造軍の動員・進軍・進駐には当然宗像地域も関わる。両者の指摘は大きな矛盾もなく、筆者も賛同する。ならば、こうした交流に宗像地域はどう関わり、何を期待されたか。本稿で少し深掘りしてみよう。

イ) 宗像系文物の広がりと交流とその役割（図21）

この点でまず注目されるのが嶋郡を含む福岡平野西部から糸島周辺での状況である。一帯では宗像系文物が偏在するほか、石室構造の類似性も指摘されて、胸肩君一族の服属集団である胸肩部の居住が想定される（太田・椎葉 2020 など）。上記は来目皇子が駐留した嶋郡も含まれ、単なる地域間交流だけでないことをうかがわせる。

これに関連するのが宗像地域の武装具である。宗像地域では豊富な甲冑や金銅装大刀などの武装具が集中し、齊藤氏が「軍事境界領域の最前線」と表現するように（齊藤 2019）、宗像地域では他地域よりも武装具の保有で優位に立っていた。つまり、来目皇子の進駐や「国造軍」の動員という軍事的な目的に宗像地域は応じるだけの軍備を備えており、動員に応じたと想定しても何ら不思議ではない。

こうした指摘は壱岐島の土器の系統や地域間交流

からも調和的である。最近、陶邑系（牛頸系）や瀬戸内系とともに、宗像系の甕、脚付甕のほか（太田 2020）、土師器高坏 Ea 類が存在することが明らかとなつた（中島 2023）。『日本書紀』敏達天皇十二年是歳条（583）には壱岐・対馬の防衛の重要性を間接的に述べる記事があり（堀江 2021）、大陸・半島勢力に対する防衛を意図した兵站基地としての役割が重要視され、兵士などが多数駐屯していたとされる（田中 2012）。対朝鮮半島の最前線ともいえる場所で複数系統（產地）の土器が出土する点は、まさに国造軍の動員を想起させ、宗像地域がこれらの軍事動員に参加したものと積極的に評価したい。

一方、軍事的な側面だけでもないと考える。瀬戸内海沿岸地域のうち、山口県大浦古墳群や梅ヶ崎古墳群など、沿岸部での宗像系文物の出土が確認されるほか、傍示古墳群出土須恵器の胎土分析では宗像地域に隣接する古門窯跡産の須恵器の可能性が指摘される（三辻 2005）。これらは先述したように海上交通路の東にあたり、5世紀以来であれば石棺輸送、6世紀代であれば先の物資輸送から威信財の運搬などを担った痕跡といえる。このほか、西に目をむけると8世紀だが筑前全体に広がる福岡平野から糸島半島の砂鉄（鈴木 2019）が壱岐の大宝遺跡や中尾遺跡でも出土する点も注目される（壱岐市教育委員会 2021）。先述した通り、壱岐では様々な產地の須恵器が搬入される一方、逆に壱岐では須恵器窯は発見されていないから、軍事動員の一方で様々な物資も搬入したとも捉えられる。したがって、地域間同士の物質的な交流も併行して行われていた。いうまでもなく、これらの交流は前代からの豪族間の協力関係の下成り立つと考えられる。

6. 結論

以上から、宗像地域でIV期以降に石室や土器などで様々な変化がおこる原因の一つとして、6世紀以来の地域間の交流関係を基盤とし、そこに6世紀末以降の朝鮮半島の緊迫化と来目皇子による嶋郡進駐、その物資供給のためにミヤケを中心とした海

上交通を介した集団間の接触が繰り返された点が挙がる。その結果、宗像地域は軍事動員や物資輸送を通じて集団間の交流が刺激され、石室では新たな意匠や立柱石系などの採用、土器では石室外土器供献から石室内土器供献への転換と宗像系須恵器・土師器の消失など、新たな意匠や技術が導入されるとともに、伝統的なモノ・コトを駆逐したりして宗像系文物が徐々に衰退すると考えられる。

今回、本稿の目指したところは今後の地域間交流の盤石化に向けた基礎研究の精緻化であった。結果は先行研究をおおむね肯定できる結果になったし、これだけの積み重ねがあれば冒頭で述べた目的へ到達できるかもしれない。

最後に、本稿執筆時には世界遺産課文化財係のほか、校正作業には臨時職員さんにもお手伝いいたいたおかげで形になった。記して感謝申し上げたい。

註

- (1) 宗像地域に多い、または固有の考古資料の総称を便宜上、このように呼称しておく。
- (2) 宗像郡を構成した地域のうち、古賀市や新宮町の一部は在地・非在地系資料の接触領域で（小嶋 2012）、宗像系文物の抽出には適さないので、本稿では二市町村を除外した。
- (3) 7世紀以降の筑前地域では、単室横穴式石室の羨道途中に仕切石を設けて「室」的空間を設定する事例がよくみられる（下原 2020）。宗像地域でも長羨道構造が普及するIV期以降に同様の事例が多数確認され、これらも他地域からの伝播ととらえられる。
- (4) 大型の短頸壺か、これに脚部が付くもの。これらは当初牛島氏の検討に端を発し（牛島 1998）、寺井誠氏により小伽耶の陶質土器が祖形になることが指摘され（寺井 2012）、現在では朝鮮半島南部の脚付短頸壺の展開を整理したうえで、小伽耶のプロポーションに阿羅伽耶系の肩部加飾をくわえて独自創出したものと評価されている（太田 2016）。
- (5) 脚付壺については以前検討したことがあり（太田・椎葉 2020）、その特徴は全体的に屈曲が弱く直線的にのびる口縁部をもち、他の生産地よりも寸胴な点に集約される。
- (6) ここでは宗像地域でみられる垂耳状口縁壺のほか、大壺に見られる交互斜線文配置の壺の消長も取り扱う。

参考文献

- 足達悠紀 2022 「律令国家形成期の須恵器生産体制－6世紀後半から8世紀初頭にかけての北部九州の諸窯跡を対象に－」『令和4年度九州考古学会総会 研究発表資料集』、九州考古学会
- 壱岐市教育委員会 2021 『古代世界の中の壱岐』
- 岩崎仁志 2024 「胸肩君勢力と周防・長門」『山口県埋蔵文化財センター紀要』第37号、山口県埋蔵文化財センター
- 牛嶋英俊 1998 「大型脚付短頸壺について」『小原古墳群』若宮町文化財調査報告書、第15集
- 太田智 2016 「脚付短頸壺考」『七隈史学』第18号、七隈史学会
- 太田智 2020 「九州の須恵器甕からみた地域性と地域間交流」『福岡大学考古学論集3－武末純一先生退職記念－』、武末純一先生退職記念事業会
- 太田智 2022 「いわゆる「宗像型横穴式石室」の成立過程」『宗像市史研究』第5号、新修宗像市史編集委員会
- 太田智 2023 「朝町木山遺跡・山田棒ノ尾遺跡・山田井ノ上遺跡の窯資料」『宗像市史研究』第6号、新修宗像市史編集委員会
- 太田智・椎葉実郁 2020 「福岡市広石II-2号墳出土須恵器の再検討」『七隈史学』第22号、七隈史学会
- 太田宏明 2016 『横穴式石室と古墳時代社会』、雄山閣
- 木村龍生 2009 「陶邑編年と九州の古墳時代須恵器について」『考古学研究』56-1、考古学研究会
- 小嶋篤 2012 「墓制と領域－胸肩君一族の側足跡－」『九州歴史資料館研究論集』37、九州歴史資料館
- 小嶋篤 2015 「古墳時代後期の埋葬施設と墳丘」『古墳時代の地域間交流3』、九州前方後円墳研究会
- 小嶋篤 2018a 「「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君」『沖ノ島研究』第4号、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 小嶋篤 2018b 「古墳時代後期における横穴式石室墳の展開－日韓交流の視点から－」『海峡を通じた文化交流』九州考古学会・嶺南考古学会第13回合同考古学大会、九州考古学会・嶺南考古学会
- 小嶋篤 2021 「瀬戸内海西端における横穴式石室墳の様相」『古文化談叢』第87集、九州古文化研究会
- 小嶋篤 2022 「宗像型横穴式石室墳の研究－石室構築技術と墳丘構築の調査視点－」『九州歴史資料館研究論集』47、九

- 州歴史資料館
- 小嶋篤 2023 「遠賀川流域と飛鳥時代」『集落と古墳の動態IV－飛鳥時代－』、九州前方後円墳研究会
- 齊藤大輔 2019 「古墳時代後・終末期における武装具保有の実態」『九州考古学』第94号、九州考古学会
- 鈴木瑞穂 2019 「北部九州の砂鉄の特性からみた製鉄～鍛冶関連遺物の特徴および鍛冶原料の流通について」『九州考古学』第94号、九州考古学会
- 重藤輝行 1999 「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』、九州前方後円墳研究会
- 重藤輝行 2009 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『地域の考古学』、佐田茂先生退任記念論文集刊行会
- 重藤輝行 2010 「古墳時代の北部九州における土器副葬儀礼の出現」『古文化談叢』第65集、九州古文化研究会
- 重藤輝行 2011 「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告』I、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 重藤輝行 2016 「古墳の埋葬施設の階層性と地域間関係」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集』田中良之先生追悼論文集編集委員会
- 下原幸裕 2014 「北部九州における横口式石槨の影響」『九州歴史資料館研究論集』39、九州歴史資料館
- 下原幸裕 2020 「北部九州における横穴式石室の終焉」土生田純之編『横穴式石室の研究』、同成社
- 辰巳和弘 1983 「密集型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』100、古代学研究会
- 田中聰一 2012 「壱岐島・対馬島の諸勢力と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会
- 田中史生 2002 「ミヤケの渡来人と地域社会－西日本を中心に－」『日本歴史』第646号、日本歴史学会、吉川弘文館
- 田中史生 2023 「秦氏と宗像の神－「秦氏本系帳」を手がかりとして－」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 特別研究事業 成果報告書』『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
- 田村悟 1999 「終末期群集墳の展開－北部九州を中心に－」『古文化談叢』第43集、九州古文化研究会
- 田村悟 2009 「北部九州の終末期群集墳再考」『終末期古墳の再検討』、九州前方後円墳研究会
- 津曲大祐 2004 「博多湾沿岸地域の石室構築技術」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念事業会
- 寺井誠 2012 九州前方後円墳研究会編「6・7世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会
- 土井基司 1992 「横穴式石室から見た群集墳の諸相」『九州考古学』第67号、九州考古学会
- 中島圭 2023 「古墳時代後期～終末期における古墳出土の土師器－九州北部を中心に－」『七隈史学会第25回大会 考古部会研究発表報告集』七隈史学会
- 西田巖 1994 「小石室からみた群集墳終末の諸相」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会
- 花田勝弘 1990 「宗像・相原古墳群の検討」『地域相研究』第19号、地域相研究会
- 花田勝弘 1991 「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究』第20号上巻、地域相研究会
- 花田勝弘 2002 「筑紫宗像の生産工房」『田辺昭三先生古稀記念論文集』
- 堀江潔 2021 「壱岐島で活躍した海人と古代豪族たち」『古代世界中の壱岐』壱岐市教育委員会
- 前田達男 1994 「終末期における立地形態の共通性とその意義」牟田裕二君追悼論集刊行会編『牟田裕二君追悼論集』
- 三辻利一 2005 「傍示古墳群出土須恵器の蛍光X線分析」『傍示古墳群』山口県埋蔵文化財センター
- 柳沢一男 2003 「複室構造横穴式石室の形成過程」『新世紀の考古学』、大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会